

「数理科学」は語る

30年前から現代へのメッセージ

細井 勉

1980年1月号

「無」という特集はできそうかと、当時の編集者から尋ねられ、面白そうだと思ったのを憶えています。数学では、20世紀の初頭に、空集合だけをもとにして数学の構造を作り上げていました。つまり、「無」だけから数学的なモノを作り出していたのです。他の分野で「無」をどう捉えているかと興味と期待を持ったものです。

特集の中の私のエッセイは、日本語について、「どこでも、誰も、何も、見なかった」という文の考察、つまり「無」の表現を考えるものでした。「どこでも」のような否定を期待する語を3つ並べて「見なかった」というただ1つの否定語で受けている構文に興味を持ったのです。同じ構文を持つ言語があることが、一層、私を惹きつけた要因ともなっていました。その頃、私は理数教育との関係で日本語を研究していました。そこでは、教育の現場での実践が課題でした。でも、実践は期待したほどには浸透しませんでした。その一因は、学生・生徒も、教師も、自分は日本語を知っていると思い込んでいたことにありました。その思い込みが誤解を生み出し、理数教育を妨げていたのです。この研究は、現在に至るまで、永く、続くことになりました。

「無」を人格化して面白がっていた作家に19世紀イギリスのルイス・キャロルがいます。一例は、「誰をも(nobody)見ない」を「Nobody(という人物)が見える」と曲解するものです。これは「無」にモノを見ていることになります。キャロルは数学教師でもありましたから、キャロルのnobodyの捉え方は数学的であると思えました。

特集から10年経った頃から、私個人としては、キャロルの「無」について数学的な考察を始めました。有名なチェシャ猫が姿を徐々に消した後に「にたにた笑い」を残すのは、実体を消去した後の「無」を論じていたのです。20世紀の数学の逆を行く面白さを感じました。同様に、蠟燭が消えた後の炎を論じながら、人



の死後の魂について述べていたりもします。

そのようなことについての私の考察は「無」の特集から20年ほど経って、英文学の論文として完成しました。それは、キャロルの没後100年の時期のことで、その記念行事に参加する形で実現しました。

その後、キャロルの行列式論や選挙理論の論文の翻訳・解説をしたのですが、いわば無を見ることに発した研究が実をつけ始めた感じとなりました。キャロルの行列式論は、コンピュータとの関係からキャロルの時代よりも興味を持たれるようになっていました。選挙理論は小選挙区制の不公平さを論じていたのですが、ちょうど日本で小選挙区制が採用され、キャロルの主張の妥当性をあざやかに見せてくれました。

(ほそい・つとむ)